

『ベアトリクス』におけるカミーユ・モーパン

—ブルターニュの女王—

柳 美希子

はじめに

小説『ベアトリクス』の第一部は1838年に執筆され、1839年に *Le Siècle* 紙に新聞小説として掲載された。その後、Souverain 社から『ベアトリクスあるいは強いられた恋』として出版された。この小説は3部構成になっており、「家父長制家族」、「有名な女性」、「敵対関係」と名付けられた。そして、「人間喜劇」の初版、第3巻の「私生活情景」に『ベアトリクス』の第一部が収められたのは1842年だが、第一部は「人物」、第二部は「悲劇」と題名が変更されている。『ベアトリクス』の第二部は「ある貞節な妻の小さな試練」という題名で *Le Messager* において1844年から1845年に発表されたのだが、第一章は「ハネムーンの物語」、第二章は「敬虔な妻の腹黒さ」という題名が付けられた。「人間喜劇」には1845年に『ベアトリクス』最終章、第3部「回顧的姦通」として第4巻に収められた。

この物語の最初の舞台はブルターニュ地方のゲランドとレ・トゥーシュである。ゲランドは実在の地名だが、レ・トゥーシュはバルザックの創造した場所で、『ベアトリクス』の原稿においてバルザックが書いたものによると、ゲランド近くにある実在の「レ・マレ」という場所である¹⁾。この物語のあらすじはゲランドの領主デュ・ゲニック男爵の息子カリストの女性作家カミーユ・モーパン、本名フェリシテ・デ・トゥーシュ嬢と侯爵夫人ベアトリクス・ド・ロシュフィードへの恋物語と青年の心情を表す作品である。カリストが物語の主人公であるが、読み進めていく

と実はカミーユ・モーパンという女性作家が大きな役割を演じて物語が進行していることに気づく。

ブレイヤード版の注釈者マドレーヌ・アンブリエール＝ファルジョーは、「人間喜劇」の『ベアトリクス』はベアトリクスと音楽家コンティの恋愛話が実在のマリー・ダグー伯爵夫人と音楽家リストとの恋愛²⁾を想起させるため、当時は批判的の的となったとしている³⁾。実際バルザックは1838年にジョルジュ・サンドのノアンの館において、ダグー伯爵夫人とリストのイタリア旅行の話を聞いて物語の着想を得ている⁴⁾。また、カミーユ・モーパンについてはバルザックがハンスカ夫人への手紙においてジョルジュ・サンドを投影した人物であると述べている⁵⁾。しかし、本論文では実在の人物の恋愛話の側面ではなく『ベアトリクス』における主要人物で女性作家の「カミーユ・モーパン」の人物描写を軸とし、その比喩表現の視点から読み解く。本論文で特に指摘したいのはカミーユがこの作品においてエジプトの女王「クレオパトラ」に喩えられていることだ。

本テーマの副題として「ブルターニュの女王」という表現を用いているが、これはミシェル・ビュトールの著書 *Improvisations sur Balzac* の第3巻、*Scène de la Vie Féminine* の「ブルターニュのクレオパトラ」という章の題名から借用したものである⁶⁾。ビュトールは「カミーユが男性的才能を持つ女性作家として「人間喜劇」の作品を渡り歩き、『ベアトリクス』で頂点に達し、「本当のクレオパトラとなる」と指摘している。しかし、ビュトールは作品全体について十分に説明していない。そのため、執筆者はこの作品全体を通してカミーユが容貌や地位だけでなく、性格や言動すらも「クレオパトラ」を想起させることに着目し、カミーユが「クレオパトラ」に喩えられていることについてさらに解釈を深めたいと考えた。それによりこの作品がモデル小説ではないより高度な文学作品であることが理解されるだろう。

また主人公とは言えないカミーユは、真のヒロインであるベアトリクスやカリストの行動を導き作品を進行させているほどの人物である。作

品のタイトルであるベアトリクスと比較し、クレオパトラの比喩に隠されたカミーユの人物像と心情について再解釈を試みたいと考えた。

『ベアトリクス』において何故カミーユ・モーパンがブルターニュの女王と描写されているのかまた、そのことで物語にどのような影響が与えられたのか。ブルターニュにある彼女の館はパリ風の豪華な内装を施しており、その豊富な財力を示す。そして、その館の周辺には塩田があり、そこで働く人々から彼女の邸は「城」と呼ばれている。また、「塩田」は「砂漠」と比喩表現されており、その砂漠の頂点にあるカミーユの存在と「城」の豪華さはエジプトの女王クレオパトラとその王宮に比べられるものとして描かれているとも考えられる。カミーユとクレオパトラとの比較、ブルターニュとの関連性を読み解くことでこの小説とカミーユ・モーパンという人物の重要性が浮き彫りになるだろう。

I. 登場人物と実在のモデルの問題

バルザックは1840年2月のハンスカ夫人への手紙において、小説『ベアトリクス』について「そう、デ・トゥーシュ嬢はジョルジュ・サンドで、ベアトリクスはあまりに良すぎるマリー・ダグー夫人です⁷⁾。」と認めている。

女性作家カミーユ・モーパンは本名フェリシテ・デ・トゥーシュ嬢の偽名であり、男性同様に執筆活動をし、男装して煙草も吹かす人物である。語り手はまたその服装の近東趣味を描写している。それを示すのは物語でカリストがまだカミーユを思慕しており、彼女の部屋に入って見た光景である。

頭にはその頃はやった赤ビロードの網帽子を被り、そこから黒いつやつやした髪の本がはみ出していた。ごく短いフロックコートが現代風ギリシア胴着のような形になり、刺繍した膝当てのついたバチスト織の長ズボンと紅地に金を散らしたトルコ風の上靴を見せていた⁸⁾。

さらに、カミーユは40歳でありながら豊かな黒髪をもっている。「黒髪」は「金髪」であるベアトリクスと対照的であり、性格や考え方、そして振る舞いにも対照性が見られる。カミーユの近東趣味の服装に対して、ベアトリクスの服装は貴族的で女性らしさを強調する服装であり、そのことがより一層カリストを惹き付けることになる。アリーヌ・ミュラはカミーユについて「『優れた機知』である彼女は個人のそして知的な計画において自由を選んでいる。彼女は長い間結婚と母性を拒絶している⁹⁾。」としている。さらにベアトリクスとカミーユの性格について、「一方（ベアトリクス）は情熱的な幸福の道に従い、他方（カミーユ）は書くことへの情熱に従うのだ¹⁰⁾。」としている。またミュラによると、ベアトリクスは「誘惑する女性の役割を完全に演じており、他方（カミーユ）は時折社交界の女性の行動を支持する、依然としてなによりも優れた女性である¹¹⁾。」つまりカミーユはベアトリクスと全く対照的な女性として描かれている。一方で語り手はカミーユの眼については次のように詳しく語る。

力強く引かれた眉の弧は折々恒星のようにきらりと火花を輝かす眼の上に伸びている。(省略) 情熱の一刻にはカミーユ・モーパンの眼は崇高になる。眼差しの黄金は黄色の白眼に火をつける。そして全てが燃え上がる。しかし休んでいる時、眼差しは曇っている。瞑想の麻痺状態はしばしば痴呆のような外観をそれと与える。魂の光がそこに無い時は顔の線も同様に活気を失う¹²⁾。

こうしたカミーユの描写はジョルジュ・サンドの人物像を投影しているように見える。村田京子の先行研究においても、このことは指摘されている¹³⁾。実際、バルザックがジョルジュ・サンドのノアンの館に滞在した時に、1838年3月2日のハンスカ夫人への手紙において、サンドが部屋中で煙草を吹かしながら、「恐ろしい不幸にもかかわらず一筋の白髪もなく、濃い褐色の顔色には変化がなく、美しい両目はきらきらと輝き、

考えている時には全くもって動物のように見えます。(省略)彼女のあらゆる表情は眼にあるのです¹⁴⁾。」と述べている。つまり、カミーユが40歳でありながら黒髪であることと、サンドも白髪がある年齢にも関わらず少しもないことにも類似しており、カミーユの眼もサンドと同じ表情をもつとも言える。

このことについてビュートルはカミーユ・モーパンには「女性作家における男性的天才という認識があり」、それは「ジョルジュ・サンドへの多大な賛辞¹⁵⁾」あるとしている。さらにビュートルが指摘したように、「カミーユという名前は性別を区別しない」。同様にジョルジュも性別を区別しない名前である。また、幼少期のオーロール、つまりサンドが音楽や文学、自然科学などを祖母と家庭教師に教育されてきた¹⁶⁾ように、『ベアトリクス』ではカミーユが大伯父のフォーコンブ氏に一人で自立できるように男の子のように育てられたことも類似している。カミーユが大伯父の書斎で驚くべき読書量をこなし、膨大な知識を貯めこんだというエピソードから、処女性を持ちながら頭脳は博識であったことが伺える。しかし、その出自は異なる。ジョルジュ・サンドが貴族階級の父親と小鳥屋の娘であったブルジョワ階級の母親の間に生まれた一方、カミーユは両親共に王党派の貴族である。彼女がサンドを反映しているのは否めないが、その振る舞いは王族のクレオパトラがアレクサンドリア図書館で驚くべき知識を吸収していた¹⁷⁾ こととも重なる。

ベアトリクス・ド・ロシュフィード侯爵夫人に関しては、バルザックが1838年にジョルジュ・サンドのノアンの館において、サンドの友人であったマリー・ダグー伯爵夫人とリストのイタリア旅行の話聞いて物語の着想を得たのだが、バルザックは原稿にマリー・ベアトリクスという名前を付与していた。しかし、これはあまりにも露骨なマリー・ダグー夫人の暗示と取られるため、小説ではマリーを削除している¹⁸⁾。また、ベアトリクスがカミーユの才能を羨み、成功したいと思ってサロンを開く所はダグー夫人がサンドのように才能を發揮したいと考え、ダニエル・ステルンという男性名を使って文壇デビューし才能を誇示しているところ

ると似通っていると言えるだろう。しかし、ベアトリクスはダゲー夫人のように文壇で大きな成功を取めたとは言えない。一方カミーユは現実的に女性作家として成功を取めたサンドのように描かれているとも言える。そして、コンティに関してはバルザックがハンスカ夫人への1843年5月の手紙で述べるように、「コンティは音楽家になったジュール・サンドーです。」¹⁹⁾と述べている。つまり、バルザックはリストの音楽的才能と小説家サンドーの性格を組み合わせることで創造した人物であり、必ずしもリスト一人がモデルであるとは言えないだろう。

物語と実在のモデルとの比較によりカミーユは容姿や教育においてサンドに酷似しているように思えるが、それ以上に小説では彼女には女王のような振る舞いがあるのであり、モデル小説とは言えないことを物語の舞台からも検証していこう。

Ⅱ. カミーユの革命的立場——レ・トゥーシュとゲランド——

カミーユの立場や振る舞いを明らかにするため、フランス革命におけるパリとブルターニュの関係について見ておきたい。ブルターニュ地方は15世紀末までは一つの公国であり、ケルト系民族としてブルトン語を話し、フランス語を話す人々はほとんどいなかった。ブルターニュ地方は『ベアトリクス』の語り手が語るように、中世の封建制度が色濃く残っていた。ニコール・モゼは「ゲランドだけは手が触れられず、町にとって、真の奇跡を形成する」のであり、「『ベアトリクス』のゲランドは街路も大建造物もない都市である。そこはブルターニュの中核であり、観光客というよりも哲学者であるバルザックにとって重要な歴史における場所である²⁰⁾。」と述べている。大革命時代、パリにおける新体制を目指す大革命が推し進められる中、旧体制を維持したいブルターニュ地方の貴族や農民は反乱を起こす。それが「ふくろう党」が蜂起するヴァンデ農民戦争である。『ベアトリクス』の登場人物であるゲランドの領主で「老ヴァンデ人」、「老ふくろう党」のデュ・ゲニック男爵は小説『ふくろう党』でこの戦争へ参加している。『ベアトリクス』においてもベリー侯

爵夫人がヴァンデで起こした地下運動に男爵と息子カリストが参加し、男爵夫人をひどく心配させたことが描かれている²¹⁾。

一方、カミーユの出自は王党派の家柄の良い貴族階級出身である。語り手が小説で述べるように、近衛の副官だった父親は市民が蜂起して王政が転覆した1793年8月10日に殺害され、その後、近衛兵であった兄も殺される。母は悲嘆のあまり死に、カミーユは2歳で孤児となる。その後、修道院の伯母に預けられるが彼女も死に、ナントの大叔父フォーコンブ氏に育てられる。つまり、彼女はブルターニュで生まれ教育を受けた生粋のブルターニュ女性である。しかし、その後ナントのサロンで音楽や文学の才知を開花させると、パリへ赴き、そこでカミーユはオペラを書き、2冊の芝居脚本を出版して成功することになる。そして、彼女はパリで生活していたがレ・トゥーシュへも戻るといふ二重の生活を送っていた。

カリストがパリの様式を持ち込んだカミーユの元へ足繁く通っていることに男爵夫人は嘆き、その場面で語り手はカミーユについて、「この穏やかで静かな家庭では、カミーユ・モーパンは一つの革命だったのだ²²⁾。」と語っている。さらにこの後、カリストの父、デュ・ゲニック男爵が男爵夫人にカミーユについて次のように述べている。

「ねえ、ファニー」とみだらな調子で老男爵は言う、「あなたはそういう事が分かるにはあまりに天使すぎるよ。デ・トゥーシュ嬢は鳥のように黒く、トルコ人のように強いそうだ。彼女は40代なのだし、私たちがかわいいカリストが彼女のところに向かって行くのは当然のことだった²³⁾。」

男爵は夫人を天使と呼びつつ、「トルコ人」や「鳥」という比喩でカミーユの人物を表現している。旧体制を体現するデュ・ゲニック男爵がパリの暮らしを持ち込むカミーユに反発していることが読み取れる。

アンブリエール＝ファルジョーはプレイヤー版の序文でこうしたゲ

ランドの人々が暮らす場所を「静寂と不変の世界」とし、レ・トゥーシュは「動き・騒めき・光・贅沢・空想・不条理・退廃」を示している²⁴⁾と述べている。すなわち彼女がパリの洗練された教養をゲランドに持ち込むことは革新的文化をもたらしていると考えられる。カミーユはブルターニュの女性であるにも関わらず、ゲランドでは異国の人間とみなされており、その立場は曖昧である。それはゲランドの町のグリモン神父がカミーユについて考えている人物描写にも現れる。

彼女はまだ小さな子供たちを取って食いもせず、クレオパトラのように奴隷を殺しもせず、誤ってトゥール・ド・ネールの女主人公を非難するように男性を川に投げ込ませもしなかった。しかし、グリモン神父にとってはこの怪物のような女はセイレンと無神論者に似ており、女性と哲学者の不道徳的結合を形成し、女性の弱さを抑制しあるいは利用するために作り出されたあらゆる社会法則に違背するものだった²⁵⁾。

語り手はここで「クレオパトラ」を引き合いに出している。旧体制のゲランドの人々にとって「クレオパトラ」は怪物のような存在とみなしており、それはカミーユの「monstruosité 怪物性」²⁶⁾と繋がる。

グリモン神父は当時男性の領域であった知的活動に女性が携わることには批判的であり、カミーユを「女」としながらも怪物や海の精に喩えており、そこに彼女の性別の曖昧さが付与されているように読み取れる。パリで女性が知的活動に関わることは一般的ではなかったため、こうした表現が用いられていると考えられるが、カミーユに特に反映されているのは卓越した才能をもつためにブルターニュに君臨した人物であるとも考えられる。

こうした性別の曖昧さは語り手が次のように語っている。

19世紀の何人かの有名な女性の一人であるカミーユ・モーパンは文壇デビューの男らしさのせいで本当の男性作家として長い間受け入れら

れてきた。(省略) どのような事情の繋がりで一人の若い娘が男性の姿をとることが実現し、どのようにフェリシテ・デ・トゥーシユは男性となり作家になったのか説明するには、何故スタール夫人よりも幸福で自由なままでいて、彼女の名声がこれほど大目に見られるのか、多くの好奇心を満足させ、人類のうちに記念碑のようにそびえ立ち、特異性によってその榮譽が有利に働く恐るべきことの一つであると証明することにならないだろうか？²⁷⁾

語り手はカミーユに「vitalité 男らしさ」という言葉を用いて、「若い女性が男性の姿をとる」、「男性となり作家になる」としている。つまり「monstruosité 恐るべきこと」、言い換えれば「怪物性」を孕んでいるとしている。つまり、カミーユはその男性的性質によって「怪物」のように見られ、作家としての才能の栄光が女性らしさをなくしてしまっているように描かれているため、彼女の性別の曖昧さが表れるのだ。

Ⅲ. カミーユ・モーパンの人物比喩表現 — クレオパトラ —

カミーユの人物比喩表現を見る前に、バルザックが他の作品でどのように「クレオパトラ」という言葉を用いていたかをここで述べておきたい。バルザックが『人間喜劇』の中で、「クレオパトラ」という言葉を用いているのは10回である²⁸⁾。『ベアトリクス』で用いられたのは2回であり、いずれもカミーユの人物描写に用いている。他の女性の登場人物に用いられているのは小説のタイトルでもあるカトリーヌ・ド・メディシスに「クレオパトラ女王²⁹⁾」、そして『娼婦の栄光と悲惨』の高級娼婦エステルである。他には比喩として「クレオパトラの真珠³⁰⁾」、「クレオパトラの優雅さ³¹⁾」や魅力はあるが欠点のある女性の比喩として用いられているものもあれば、老侯爵の尊大な態度、老婆が飼う雌鶏の名前にも用いられている。つまり、バルザックは「クレオパトラ」という言葉を歴史上の人物のイメージとして用いてはいるが、ほとんどは一時的な比喩表現として用いていると考えられる。しかし、その中でも『ベアトリ

クス』においてカミーユがいかに印象深く「クレオパトラ」という人物に比喩表現されているかを見ていくことでその違いが明らかになるだろう。

カミーユは1836年に40歳だったが、語り手はその容姿は「40歳でも25歳と言っても良かった³²⁾。」と語っており、さらに東洋的人物として描写されている。

彼女はイタリアの美女と分かる日中に光で白く見えるオリーブ色の顔色をしている。(省略) 激しい感情でも抱かなければ頬にかすかな赤みが差すこともないが、それすらもすぐに消えてしまう。この特徴は野蛮人の無関心さを彼女の顔に与えているのだ。この顔は楕円形というよりも丸く、アイギナ島の古代遺跡の浅浮彫の美しいイシス像の顔に似ている。砂漠の火に磨かれ、エジプトの太陽に優しく触れられたスフィンクスの顔の清澄さがある。このように肌色はこの顔の端正さと調和している。黒く豊かな髪が編まれて、メンフィスの彫像の筋のある二重の髪紐の頭髪のように首に沿ってたれ、全体の形の端厳さを続けている³³⁾。

語り手はカミーユの顔には「sauvage」野蛮人の無関心さが表れると描いている。しかし、先にカミーユの眼の描写を見たように、それは一時的な瞑想の中でのことであり、情熱を燃やすとその眼は崇高になるのだ。さらに死者の守護神「イシス」という特徴を示し、既に村田京子や渡部浩見が指摘しているようにそれは「神話性」をもたらしている³⁴⁾。古代エジプトでクレオパトラがイシスの地上の化身とされていた³⁵⁾ことから、「イシス」がカミーユに投影されたと考えられる。また、カミーユの人物描写には「イシス像」の他に「砂漠」「スフィンクス」「メンフィス」というエジプトに関する言葉が多数用いられている。そして、語り手は「クレオパトラ」のようであると語る。

デ・トゥーシュ嬢はものを言うよりも人の話を聴いている方が多い。その沈黙とじっと動かぬ深い眼差しで人を恐れさせる。本当に教養のある人々の中で彼女を見てクレオパトラのことを、あの世界の相貌を危うく変えそうだった褐色の乙女のことを考えぬ者はいなかった。しかし、カミーユにあっては肉体は実に完全で、実に引き締まったライオンのような性質なので、多少トルコ人風の男であれば、こんな偉大な精神がこんな肉体に込められていることを残念に思い、そっくり女性であってほしいと思ったであろう³⁶⁾。

ビュートルはこの描写について、カミーユは「エジプト祖国を救い、節度を欠いた圧政者から祖国を解放する本物のクレオパトラになる³⁷⁾」とし、また顔についてレバント地域の人の顔色をしていると述べている。カミーユは東洋の風貌を、特にクレオパトラの東洋的な容姿を持つ女性なのである。この異国人のような描写はカミーユとクレオパトラの教養からも比較できる。カミーユはフォーコンブ氏の館で音楽・文学や自然科学、そして様々な言語を習得し、成人した後はパリで芸術家を集めてサロンを開いた。さらに、クレオパトラがエジプトでギリシャ式教育を受けて芸術を保護したように、カミーユはブルターニュの出身ながら、パリで身につけた洗練された教養を封建的な土地ゲランドに持ち込み、革新的文化をもたらしたと言えるだろう。それはクレオパトラがローマとの関係を密接に結んで異国とのつながりを常に持っており、彼女が異国文化に開放的で熱心に芸術を保護していたこととも共通点がある。

その一方で、カミーユは男性的な特徴を併せ持つ。それはまず、非常に引き締まった彼女の肉体が、「ライオンのような性質 nature léonine」を持つ、という点にあらわれている。またカミーユとベアトリクスがカリストへの愛情について言い争いをしている場面においても「フェリシテは憤怒のメスライオンの形相を唾然としたベアトリクスに示した³⁸⁾」と語り手は語っている。つまり、カミーユがその強さで人を圧倒する気質をもっていたことが読み取れるのだ。今ひとつは、「感ずる代わりに判

断」するという傾向がある、という点である。普通なら、「女性はまず感受し、次に享樂し、終わりに判断³⁹⁾」するところを、カミーユは逆のことを行くと語り手は述べている。つまりそれは身体的特徴と物の考え方からうかがわれるのだ。

さらにカミーユとクレオパトラとの類似を考察するため、彼女が住むレ・トゥーシュの描写を見てみよう。

ゲランドから数百歩のところ、ブルターニュの土地は途絶え、塩田と砂丘が始まる。海と大地の間の縁のように決して車を見ない地面をうがつ道によって海が残した砂漠に降りる。この砂漠は不毛な砂、塩を収穫する泥だらけの土手で囲まれたむらのある形の沼とル・クロワジックの島を大陸から切り離れた海の小さな海峡がある。(省略) この樹々は暴風の犠牲者で、文字通り風と潮にもかかわらず成長し、塩田の沼の奇妙さと凝固した海に似た砂丘を悲しげな光景であっても、意外には思わないようにする⁴⁰⁾。

レ・トゥーシュは塩田と砂丘がある「砂漠」として描写され、カミーユがここで暮らすということはゲランドという町があるにもかかわらず、切り離され孤独に暮らしているというイメージがつかめる。つまりゲランドがブルターニュという土地に根ざしているのに対し、レ・トゥーシュは全く誰も寄せ付けない、孤立した場所であるということになるだろう。塩田や砂丘を「海が残した砂漠」として比喩表現し、その広大で不毛な土地に暮らすカミーユを孤独ではあるが、その土地を支配する人間として描いているようにも考えることができる。それを示すのがカミーユの家であり、語り手は次のように説明する。

今日のレ・トゥーシュは一つの財産である。しかし「塩づくりの浜子たち」は依然として「城」と呼んでいる。もしも領地が女主人の手に入っていなかったら、彼らは「殿様」と言うかもしれない。(省略) 明

らかにこの家はル・クロワジックとパの町をゲランドに結びつけ、沼に君臨する指輪のようにそこにある小さな城の廃墟の上に建てられていた⁴¹⁾。

周辺には「砂漠」と表現される塩田があり、そこで働く人々から彼女の邸は「城」と呼ばれる。そして、その「城」はパリ風の豪華な内装が施されており、その豊富な財力を示す。さらに、「seigneurisait 君臨した」という表現でカミーユがこの家の主であることを示し、そこで働く塩づくりをする浜子たちが「seigneur」と呼んだであろう彼女が、塩田の沼全体を完全に支配しているということが示されている。したがって、カミーユが「ブルターニュの女王」として君臨していることが読み取れる。

さらにカミーユは支配する人間として、この物語でしばしば「鷺」として描かれており、クロード・ヴィニョンを「鷺」のようにさらってきたと語られている。

彼女はクロード・ヴィニョンをパリからレ・トゥーシュへ、彼を研究し、何か荒々しい決心をしようと、鷺が小山羊をさらうように連れてきた。しかし彼女はカリストとクロードを同時に欺いていた⁴²⁾。

クレオパトラがローマの英雄に堂々とした態度で接し抜け目なく観察したように、カミーユは「鷺」のようにさらって研究した文芸批評家クロードとカリストの「前に立って、全身全霊で輝くその眼が放つ閃光で彼らを圧倒した」。この態度からは男性をも支配する力が備わっていることが読み取れる。ニコール・モゼはこの描写について、「彼女のカリストへの役割は『ゴリオ爺さん』のラスティニャックや『娼婦の栄光と悲慘』のリュシアンに向き合う「ヴォートラン」の役割とも言える⁴³⁾」としている。それはカミーユが恋愛においてもカリストを駒のように動かしベアトリクスを恋愛へ導いたように、周りの人々を支配する力を持っていることに繋がる。物語においてカミーユはベアトリクスの人物描写をカ

リストに話して聞かせる。侯爵夫人の容姿の美しさ、女性的な性格によって、カリストの想像を刺激し、ベアトリクスに悟られないようにカリストの好意を隠し、ベアトリクスが逆に好意を持つように仕向ける⁴⁴⁾。しかし、ベアトリクスはカミーユの策略にはまっていることに気づき憤慨するのだ⁴⁵⁾。このようにカミーユは物語の舞台だけではなく周りの人間も支配する女王の役割を持っているといえるだろう。

IV. カミーユの母性と心情

カミーユの母性について、中村加津はカミーユの「母性」に焦点を当て、『ベアトリクス』の小説技法について述べている⁴⁶⁾。その研究では、カリストの母とカミーユの母性は「自然の愛」と「人工の愛」⁴⁷⁾と分けられると述べている。そして、「彼女はカリストの子供のような純な心を愛している。しかしその愛が完全には母性愛とはなりえないのである。」⁴⁸⁾と結論付けている。

しかし、カミーユの愛は、完全には母性愛とはなりえないものなのだろうか。ここではカミーユの比喩表現から母性を見ていきたい。カミーユの母性が象徴的に表されている場面がある。それはクロードがカミーユの心情をカリストの前で暴露した後、彼女が支配的な性格とは異なる側面を見せている場面である。

彼女は身を起こして二人の男の前に立ち、全身全霊で輝くその眼が放っている閃光で彼らを圧倒した。「クロードが話している間に」と彼女は言った。「望みのない愛の美しさと立派さが私にはよくわかりました。それは人間を神に近づける唯一の感情ではないでしょうか。カリスト、私を愛さないでね。でも私はあなたを愛しますよ、どんな女にもできないように！」この言葉にはこれまでにないほど傷ついた鷺が自らの縄張りで挙げた最も激しい叫びとなった⁴⁹⁾。

通常、『人間喜劇』では「鷺」という比喩は男性に多く用いられる。例

えば、「鷺」の比喩が最も多いのは『幻滅』の主人公リュシアン・ド・リュバンプレであり、詩人の「才能」を表している。さらに『田舎医者』の密猟者ビューティフェールには男性的「力」が表現されている。しかし、カミーユには唯一女性で「鷺」の比喩が用いられている。つまり、カミーユは眼で二人の男を圧倒する「力強さ」を持っているのだ。しかしこの「傷ついた鷺」の比喩表現には「力強さ」が軽減されており、男性を支配することができず、その女性的心情的激しい苦痛が表現されている。つまり、カミーユは結婚には関心がないとはいえ、母性は忘れていないのだ。二十歳の青年カリストに恋をするが、四十歳という歳を考えて母性的心情からカリストとベアトリクスとの恋愛を取り持つことになる。また、彼女が「望みのない愛」で「神」に近づける唯一の感情と語っているのは、カミーユが後に修道院へ入ることが暗示されている。というのも、物語で語り手が述べるようにカリスト自身が幸福になるように願って行動するような優しさを持ち、パリの洗練された思想を与えてくれるカミーユはカリストにとって、「理知の母、罪を犯さずに愛し得る母⁵⁰⁾」となるのだ。

カミーユの圧倒するような振る舞いは女王さながらである。こうした女性はゲランドには存在せず、ブルターニュの女王と呼べるだろう。しかしかたに砂漠の城で君臨しようとも、完全に人の心を支配するとまではいかない。その苦しみが滲み出ていると言えるだろう。

おわりに

カミーユ・モーパンには実在の人物ジョルジュ・サンドの性格と容姿の一部が投影されている。しかしながら、ブルターニュ人の特徴である「褐色の髪と目」、「オリーブ色の肌」をしており、「イシス神」の地上の化身であったクレオパトラの人物像も投影されている。また、彼女は作家で財に恵まれた貴族であるだけでなく、ブルターニュ地方の女性だが、パリで洗練された教養を封建的な土地ゲランドに持ち込んでいる。さらに彼女は神話的容貌に加え、男性的な物の考え方と身体的特徴をもつ人

物へと変貌していくのである。初めにパリで知的活動を行う女性作家に特有の革新的な生き様を示すが、旧体制を象徴するブルターニュ地方へ再び戻りその生涯を閉じるという人生を歩む。それはクレオパトラがローマと戦い、世界帝国を夢見ながらも自ら治めていた国で生涯を閉じることと同じ結末を辿るとも言えよう。ブルターニュに君臨する「女王」の如き存在だったカミーユは、クレオパトラが自殺することによりプトレマイオス王朝の最後の女王となって表舞台から立ち去るように、最後には修道院に入って俗世間から身を引く道を選択する。

そして、カミーユの男性的特徴は身体的特徴とその考え方から来るものである。彼女の肉体は「ライオン」のようであり、「感ずる代わりに判断」する。そのため一般の女性とは逆に行う。彼女が若い娘であった時、読書・研究をしたが、四十歳になってから初恋を見出す。しかし、二十歳も違う自分の歳を比べてその心情を抑え、母性からカリストとベアトリクスとの恋愛、カリストとサビーヌの結婚を取り持つことになる。しかし、そこには彼女が意のままに登場人物を動かしていることも忘れてはならない。カミーユは結婚には関心がないが、女性の中にある母性は忘れてはいない。つまり、彼女は才能ある作家で、貴族であって財産をもつ恵まれた人物であるだけでなく、男性的思索と身体的特徴をもつ両性具有的人物へと変貌していく。そのため、カミーユはゲランドの人々から見るとパリの革新的文化をもたらす人物であるが、その立場の曖昧さが見られる。男性的特徴をもつ両性具有的人物となるが、男性中心の社会においては排除されてしまうことになる。そこにはグリモン神父が考えるようにクレオパトラのような「怪物性」も現れるのである。

また、「鷲」および「ライオン」といった比喩表現を互に関連づけることにより、カミーユの隠された「母性」や旧体制に帰する多面性が浮かび上がる。こうしたカミーユの人物描写や彼女を取り巻く物や場所により、「クレオパトラ」のような女王としてブルターニュに君臨しているカミーユの特異性を読み取ることができ、『ベアトリクス』という小説がモデル小説とはならない小説となりえたと言えるだろう。

(博士課程後期課程 研修生)

註

- 1) Honoré de Balzac, *Béatrix*, texte présenté, établi et annoté par Madeleine Ambrière-Fargeaud, in *La Comédie humaine*, t. II : *Études de mœurs, scènes de la vie privée*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1976, Histoire du texte, p.1447.

以下、この版の引用は作品名とページのみを表記する。引用の下線部は執筆者によるものである。

- 2) ドミニク・デザンティ、『新しい女——19世紀パリ文化界の女王 マリー・ダグー伯爵夫人——』、持田明子訳、藤原書店、1991年。
坂本千代、『マリー・ダグー——19世紀フランス 伯爵夫人の孤独と熱情』、春風社、2005年。
- 3) *Béatrix*, Introduction par Madeleine Ambrière-Fargeaud, p.601.
- 4) *Ibid.*, p.605.
- 5) *Ibid.*
- 6) Michel Butor, Camille Maupin « Béatrix » -Cléopâtre en Bretagne-, *Scènes de la Vie Féminine : Improvisation sur Balzac III*, Édition de la Différence, Paris, 1998, p.189.
- 7) *Béatrix*, Introduction par Madeleine Ambrière-Fargeaud, p.605.
- 8) *Béatrix*, p.708. 拙訳。バルザック、『ベアトリックス』、バルザック全集第15巻、市原豊太訳、東京創元社、1974年、p.66-67を参照。以下、『ベアトリックス』バルザック全集第15巻は作品名とページ数を記す。

Elle avait sur la tête une de ces résilles en velours rouge alors à la mode et de laquelle s'échappaient ses luisantes grappes de cheveux noirs. Une redingote très courte lui formait une tunique grecque moderne qui laissait voir un pantalon de batiste à manchettes brodées et les plus jolies pantoufles turques, rouge et or.

- 9) Aline Mura, *Béatrix ou la logique des contraires*, Honoré Champion, Paris, 1997, p.219.
- 10) *Ibid.*, p.220.
- 11) *Ibid.*, p.221.
- 12) *Béatrix*, p.694. 拙訳。『ベアトリックス』、p.55を参照。
L'arc des sourcils tracé vigoureusement s'étend sur deux yeux dont la flamme scintille par moments comme celle d'une étoile fixe. [...] Dans un moment de passion, l'œil de Camille Maupin est sublime : l'or de son regard allume le blanc jaune, et tout flambe ; mais, au repos, il est terne, la torpeur de la méditation lui prête souvent

l'apparence de la niaiserie ; quand la lumière de l'âme y manque, les lignes du visage s'attristent également.

- 13) 村田京子は「カミーユ・モーパンの生い立ちや受けた教育、身体的特徴はサンドと酷似している。」と述べている。そして、「フェリシテの場合、身体的特徴において、女性的な「優雅さ」と男性的な「力強さ」の共存」と「両性具有的な性質」があると述べている。「女流作家」と「女性作家」：バルザックにおける女性作家像カミーユ・モーパン」、女性学研究 大阪女子大学女性学研究資料室論集 13、pp.43-44、大阪女子大学、2006年3月。

- 14) Honoré de Balzac, *Lettre à Madame Hanska 1832-1844*, 2 vols, édition établie par Roger Pierrot, « Bouquins », Robert Laffont, Paris, 1990, 2 mars, 1838, t. 1, p.441. 下線は執筆者による。

J'ai abordé le château de Nohant le samedi gras, vers sept heures et demie du soir, et j'ai trouvé le camarade George Sand dans sa robe de chambre, fumant un cigare après le dîner, au coin de son feu, dans une immense chambre solitaire. [...] Elle n'a pas un seul cheveu blanc, malgré ses effroyables malheurs ; son teint bistré n'a pas varié ; ses beaux yeux sont tout aussi éclatants ; elle a l'air tout aussi bête quand elle pense, car, comme je le lui ai dit, après l'avoir étudiée, toute sa physionomie est dans l'œil.

- 15) Michel Butor, *Scènes de la Vie Féminine*, éd. citée, p.189.
- 16) 坂本千代、『ジョルジュ・サンド』、人と思想141、清水書院、1997年。
坂本千代、加藤由紀、『ジョルジュ・サンドと四人の音楽家：リスト、ベルリオーズ、マイヤベーア、ショパン』、彩流社、2013年。
- 17) 吉村作治、『クレオパトラの謎』、講談社、1991年、pp.79-80。
- 18) *Béatrix*, Histoire du texte, p.1447.
- 19) *Béatrix*, Introduction, p.606.
- 20) Nicole Mozet, *La ville de province dans l'œuvre de Balzac : l'espace romanesque, fantasme et idéologie*, Slatkine reprints, Genève, 1998, p.209.
Le Gérard de *Béatrix* est une cité sans rues ni monuments. C'est l'âme bretonne, et sa place dans l'Histoire, qui intéresse Balzac, plus philosophe que touriste.
- 21) *Béatrix*, p.655. 『ベアトリックス』、p.22。
- 22) *Ibid.*, p.686. 拙訳。同上、p.49を参照。
Camille Maupin était une révolution dans cet intérieur doux et calme.
- 23) *Béatrix*, p.687. 拙訳。同上、p.49を参照。
Ma chère Fanny, dit le vieux baron d'un air égrillard, vous êtes trop ange pour

concevoir ces choses-là. Mademoiselle des Touches est, dit-on, noire comme un corbeau, forte comme un Turc, elle a quarante ans, notre cher Calyste devait s'adresser à elle.

24) *Béatrix*, Introduction, p.602.

25) *Béatrix*, p.687. 拙訳、『ベアトリックス』、p.50を参照。

Elle ne mangeait pas encore des petits enfants, elle ne tuait pas des esclaves comme Cléopâtre, elle ne faisait pas jeter un homme à la rivière comme on en accuse faussement l'héroïne de la Tour de Nesle ; mais pour l'abbé Grimont, cette monstrueuse créature, qui tenait de la sirène et de l'athée, formait une combinaison immorale de la femme et du philosophe, et manquait à toutes les lois sociales inventées pour contenir ou utiliser les infirmités du beau sexe.

26) 村田京子は「『怪物性 (monstruosité)』という言葉の頻度は、『人間喜劇』全体の中でもこの作品が最も高い。言わばフェリシテという人物を表すキーワードとなっている。」と述べており、「グリモン神父から見たフェリシテ像として、『怪物的な存在』という表現も使われている。」としている。

村田京子、『女がペンを執る時 19世紀フランス・女性職業作家の誕生』、新評論、東京、2011年、p.32。

渡部浩見は「怪物」に喩えられるカミーユ・モーパンに「神話」的要素が含まれていることを指摘している。渡部浩見、「『ベアトリックス』の神話」、広島大学フランス文学研究 (7)、pp.35-53、広島大学フランス文学研究会、1988年10月。

27) *Béatrix*, p.688. 拙訳、『ベアトリックス』、p.50を参照。

Camille Maupin, l'une des quelques femmes célèbres du dix-neuvième siècle, passa longtemps pour un auteur réel à cause de la virilité de son début. [...] Expliquer par quel enchaînement de circonstances s'est accomplie l'incarnation masculine d'une jeune fille, comment Félicité des Touches s'est faite homme et auteur ; pourquoi, plus heureuse que Mme de Staël, elle est restée libre et se trouve ainsi plus excusable de sa célébrité, ne sera-ce pas satisfaire beaucoup de curiosités et justifier l'une de ces monstruosités qui s'élèvent dans l'humanité comme des monuments, et dont la gloire est favorisée par la rareté?

28) 霧生和夫のコンコルダンス « Vocabulaire de Balzac », La maison de Balzac, <http://www.v2asp.paris.fr/commun/v2asp/musees/balzac/kiriu/concordance.htm#note>. を参照した。

29) Honoré de Balzac, *Études philosophiques (fin) : Sur Catherine de Médicis*, in *La Comédie humaine* Tome XI, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1980, p.447.

- 30) Honoré de Balzac, *Études philosophiques (fin)* : Séraphita, in *La Comédie humaine* Tome XI, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1980, p.803.
- 31) Honoré de Balzac, *Études de mœurs, scènes de la vie parisienne (suite)* : *Gaudissart II*, in *La Comédie humaine* Tome VII, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, 1977, p.848.
- 32) *Béatrix*, p.693. 『ベアトリックス』、p.54を参照。
À quarante ans, elle pouvait dire n'en avoir que vingt-cinq.
- 33) *Béatrix*, pp.693-694. 拙訳。『ベアトリックス』、p.54を参照。
Elle a ce teint olivâtre au jour et blanc aux lumières, qui distingue les belles Italiennes : [...] une émotion violente est nécessaire pour que de faibles rougeurs s'y infusent au milieu des joues, mais elles disparaissent aussitôt. Cette particularité prête à son visage une impassibilité de sauvage. Ce visage, plus rond qu'ovale, ressemble à celui de quelque belle Isis des bas-reliefs égyptiques. Vous diriez la pureté des têtes de sphinx, polies par le feu des déserts, caressées par la flamme du soleil égyptien. Ainsi, la couleur du teint est en harmonie avec la correction de cette tête. Les cheveux noirs et abondants descendent en nattes le long du col comme la coiffe à double bandelette rayée de statues de Memphis, et continuent admirablement la sévérité générale de la forme.
- 34) 渡部浩見、『『ベアトリックス』の神話』、広島大学フランス文学研究 (7)、pp.35-53、広島大学フランス文学研究会、1988年10月。
- 35) エディット・フラマリオン、『クレオパトラ』、「知の再発見」双書40、吉村作治監修、高野優訳、創元社、1994年、p.55。
吉村作治、『クレオパトラの謎』、講談社、1991年、p.118。
- 36) *Béatrix*, p.696. 拙訳。『ベアトリックス』、p.57を参照。
Aussi mademoiselle des Touches écoute-t-elle plus qu'elle ne parle. Elle effraie par son silence et par ce regard profond d'une profonde fixité. Personne, parmi les gens vraiment instruits, n'a pu la voir sans penser à la vraie Cléopâtre, à cette petite brune qui faillit changer la face du monde ; mais chez Camille, l'animal est si complet, si bien ramassé, d'une nature si léonine, qu'un homme quelque peu Turc regrette l'assemblage d'un si grand esprit dans un pareil corps, et le voudrait tout femme.
- 37) Michel Butor, *Scènes de la Vie Féminine*, éd. citée, p.194.
- 38) *Ibid.*, p.803. 拙訳。『ベアトリックス』、p.154を参照。
Félicité se précipita dans sa chambre après avoir montré le visage d'une lionne en fureur à Béatrix stupéfaite.
- 39) *Ibid.*, p.697. 拙訳。『ベアトリックス』、p.58を参照。

Ordinairement la femme sent, jouit et juge successivement; de là trois âges distincts, dont le dernier coïncide avec la triste époque de la vieillesse.

- 40) *Ibid.*, pp.701, 702. 拙訳、『ベアトリックス』、p.61を参照。

À quelques cents pas de Guérande, le sol de la Bretagne cesse, et les marais salants, les dunes commencent. On descend dans le désert des sables que la mer a laissés comme une marge entre elle et la terre, par un chemin raviné qui n'a jamais vu de voitures. Ce désert contient des sables infertiles, les mares de forme inégale bordées de crêtes boueuses où se cultive le sel, et le petit bras de mer qui sépare du continent l'île du Croisic. [...] Ces arbres, victimes des ouragans, venus malgré vent et marée, pour eux le mot est juste, préparent l'âme au spectacle triste et bizarre des marais salants et des dunes qui ressemblent à une mer figée.

- 41) *Ibid.*, p.702-703. 拙訳、『ベアトリックス』、p.62を参照。

Aujourd'hui les Touches sont un bien ; mais les *paludiers* continuent à dire *le château* ; ils diraient le seigneur si le fief n'était tombé en quenouille. [...] Évidemment cette maison avait été bâtie sur les ruines de quelque petit castel perché là comme un anneau qui rattachait le Croisic et le bourg de Batz à Guérande, et qui seigneurisait les marais.

- 42) *Ibid.*, p.701. 拙訳、『ベアトリックス』、p.61を参照。

Elle avait donc emporté Claude Vignon de Paris aux Touches comme un aigle emporte dans ses serres un chevreau, pour l'étudier et pour prendre quelque parti violent ; mais elle abusait à la fois Calyste et Claude : [...].

- 43) Nicole Mozet, *Balzac au pluriel*, Presses Universitaires de France, Paris, 1990, p.161.

- 44) *Béatrix*, pp.712-722. 『ベアトリックス』、pp.70-79。

- 45) *Ibid.*, pp.798, 799. 『ベアトリックス』、pp.150, 151。

- 46) 中村加津、「『ベアトリックス』に見られるバルザックの小説技法」関西外国語大学研究論集、第69号、1999年2月、pp.197-213。

- 47) 同上、p.202。中村加津はカリストの母ファニー・デュ・ゲニックとカミーユ・モーパーンを「二人の母親」とし、「互いに相手を強く意識している。」そして、「作者は二人の母親役の人物感情を全く対照的に見せている。自然のままか人工的かである。」としている。

- 48) 同上、p.210。

- 49) *Béatrix*, p.753. 拙訳、『ベアトリックス』、p.109を参照。

Elle se leva, se dressa devant ces deux hommes, et les terrassa par les éclairs que lancèrent ses yeux où brilla toute son âme. « Pendant que Claude parlait, reprit-elle,

j'ai conçu la beauté, la grandeur d'un amour sans espoir, n'est-ce pas le seul sentiment qui nous rapproche de Dieu? Ne m'aime pas, Calyste, moi je t'aimerai comme aucune femme n'aimera! » Ce fut le cri le plus sauvage que jamais un aigle blessé ait poussé dans son aire.

50) *Ibid.*, p.707. 『ベアトリックス』、p.66を参照。

Pour lui [Calyste], Mlle des Touches était la mère de son intelligence, une mère qu'il pouvait aimer sans crime.